

「大人になれなかった弟たちに……」

学習を終えて

一年二組

この話を読んで、戦争の恐ろしさ、ひもじさ、そして、そのひもじさから変わってしまう人の心が分かりました。特に、変わってしまった人がとても怖かったです。人って、何かに追い詰められると、こんなにも変わってしまうんだな、と思いました。

近藤さん

僕が思ったことは、二つあります。一つ目は、戦争というのは、どんなに優しかった人でも心を冷たいものにしてしまい、自分たちで自立していかなければならないなって思います。二つ目は、ヒロユキが死んでしまったことです。「僕」は、ミルクを盗み飲みしなければ、あと少し生きていたかもしれないので、後悔していたけど、盗み飲みでもしないと、生きていけなかったんだなあと思いました。

内木さん

戦争は、人の心も、命も奪ってしまう、とても怖いものだと思います。戦争へ行き、人を殺しにいった父や、ミルクを盗み飲みしてしまっただけで、冷たい態度を取る親戚の人、どれも戦争で、生きていくためにしたことです。そんな中、自分の命を捨てるくらい家族を必死に守り抜く母の姿が、「僕」の目には美しく映ったと思います。ヒロユキが死んで、「僕」はミルクを飲んでしまったことを後悔していると思うし、かわいかった弟の死が、悲しみでいっぱいだったと思います。これらすべてが「僕」にとって「一生忘れない」記憶だと思いました。

北川さん

作者は私たち読者に、「戦争の恐ろしさ」を「文の書き方を工夫」して、より伝わるように書いていると思った。「ヒロユキは死にました」という書き方も、「亡くなった」というより「死」と書く方が、より悲しさが伝わるし、一行で書くことにより、しんみりした感じが良く伝わって、工夫していると思った。「ナガサキ」や「ヒロシマ」も、カタカナで書いていて、「原爆で亡くなった」ということがより文から感じ取れるような書き方をしている。この文を読んで、「書き方によって、伝わり方が違う」ということが分かったし、一つ一つの言葉が全体の話に深く関わってくださることも分かりました。

赤堀さん

私はこの物語を読んで、戦争ってというのは、本当に怖いなと思いました。戦争によって家族と離されてしまったり、人の命を平気で奪ったり、人の心をとられたりすることが分かりました。戦争を行っていたときは、本当に世の中すべてが狂っているんじゃないかと思いました。小学校を国民学校と呼んだり、国民学校では天皇のことを習ったりしているので、戦争は人を狂わせることが分かりました。ヒロユキ、ヒロシマ、ナガサキをカタカナで書いてあって、それを見た私は、原爆に関して書いていることが分かって、ヒロユキもその原爆が落とされた時期に亡くなった人なので、カタカナで書くことが分かりました。私は、「僕」の後悔した気持ちは分かりました。弟のヒロユキが死んだことをとてもよく強調したり、ヒロユキが死んでから何日たったかをちゃんと日付で表しているの、とても後悔していたことが分かりました。戦争は、人を人ではないものにしてしまうので、恐ろしいなと思ったし、やってはいけないことだなと思いました。

吉田さん